

人文科学研究所創立 70 周年記念企画

# CS確立期における「回顧と展望」

—— 篠田一人氏談話記録（1969年） ——

田 中 智 子

〈はじめに〉

1944（昭和19）年、同志社大学研究所として発足した人文科学研究所は、2014年の今年、開設70周年を迎えている。近年、様々な要因が積み重なるなかで、研究所総体の研究領域は多様化を極め、「人文研の研究とは何か」を一口で定義することはますます難しい状況に立ち至っている。とはいえ、過去半世紀余りの歴史において、キリスト教社会問題研究会（Christianity & Social Problems研究会、略称CS）がその「顔」として中核的役割を果たし、同志社ならではの良質な成果を上げてきたことに、今なお異論はないであろう。

1956（昭和31）年、同志社教員の有志団体として誕生し、1959年に人文研の傘下に入ったCSの制度・組織の変遷については、『同志社大学人文科学研究所の50年』（1994年、以下『50年』）、あるいはこれに先立つ『人文科学研究所30年史』（1974年、以下『30年史』）が詳しい。また、本機関誌『キリスト教社会問題研究』の「創刊50号記念エッセイ集 キリスト教社会問題研究会と私」（2001年）、「杉井六郎名誉教授追悼記念号」（61号、2013年）や「田中真人教授追悼記念号」（56号、2008年）に寄せられた関係諸氏の追悼エッセイが、図らずもCSの活動来歴を物語る貴重なエピソード集となっている。

とはいえ、CSが還暦を迎える日も遠くはなく、創設時の事情を知る人も年々

少なくなりつつある。研究所70周年の節目に当たり、研究会の初心を振り返り、今後の活動指針を得る機会を得たい。

1969（昭和44）年の4月2～3日、関西セミナーハウスにおいて「CSセミナー」と称する合宿が開催された。当日の報告ならびに討議は録音されて、今も人文研に保管されている。本稿は当時のCS代表者・篠田一人氏（当時同志社大学文学部教授）の回顧談を中心に、セミナーの模様の一部を活字に起こしたものである。

篠田氏は1900（明治33）年山口県生まれ。京都帝国大学文学部哲学科卒業直後より西南学院高等学部にて教鞭を執り、同志社に着任したのは1942（昭和17）年のことである。高等商業学校・経済専門学校・教養学部を経て、1953年に文学部教授に就任し、学生部長・宗教部長など学内役職も歴任した。専門は宗教学・宗教哲学・歴史哲学であるが、退職に際しては、「キリスト教社会問題研究」も顕著な業績を上げた一分野として紹介されている（『文化学年報』第20輯、1971年）。実質的なCS創設メンバーの一人であり、初期の活動の牽引者であったことは、今回の記録内容のみならず、1970年の退職を記念して、同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会の名により、『日本の近代化とキリスト教』（新教出版社、1973年）が献呈論文集として編集・出版されたという異例の扱いからも容易に想像される。その功績は、次のCS代表となった竹中正夫氏の「序にかえて」（同書所収）においてまとめられている。

CSセミナーが開催されたのは、第3期人文研研究会（1965年4月～1971年3月）が5年目を迎えたところであった。「キリスト教社会問題研究」は第1研究と位置づけられ、篠田代表の下、以下の4班が編成されている（118頁参照）。

A班 明治期キリスト教の思想史的研究（明治期研究）

B班 大正期のキリスト教と社会主義（大正期研究）

C班 戦時下キリスト者および自由主義者の抵抗に関する研究（戦時下抵抗の研究）

D班 プロテスタント各派教団・各教会の資料の調査・収集・研究（教会研究、

1968年度～)

録音によると、A班は実際には「民友社研究」（代表・今中寛司文学部教授）であり、B班は「家」との関係を主題とし（代表・土肥昭夫氏）、C班は周知のとおり和田洋一氏が、そしてD班は高橋虔氏が代表を務めていた。

「CSセミナー」は、創設の中心メンバーであった篠田代表に、「CSの歩み」を振り返ってもらうというプログラムから始まった。1969（昭和44）年といえば、CS発足から13年が経ち、会員の顔触れも替わりつつあった時期である。本稿同様、初心に立ち返って活動の指針を得ようと企画された催しであった。録音から判明する限りでは、篠田氏の他、八木鉄男（人文研所長）、辻橋三郎（高校）、和田洋一・小倉襄二・森章博・郡定也（以上文学部）、高橋虔・土肥昭夫（以上神学部）、杉井六郎・太田雅夫（以上人文研）、河野仁昭（大学職員）、坂本武人（女子大）、宮沢正典（女子中高）、西田毅（法学部）の諸氏が参加し（（ ）内は当時の所属。部分参加を含み、この他のメンバーが参加した可能性もゼロではない）、人文研職員山海和子氏（結婚後は岡と改姓）が補助者として臨席している。

篠田氏は回想の冒頭において、「まさに代表者と言うにふさわしい実質を備えた住谷悦治氏の下、自分は番頭として雑務を担った」と謙遜しているが、「番頭時代」とはいえ、本誌第3号～7号（1959～1963年）には、篠田氏が常に巻頭の辞を寄せていた。本セミナー時には、さらに次の時代——篠田氏が代表となり1965（昭和40）年5月に人文研専任研究員に着任した杉井氏が「番頭」をつとめる——の到来が見て取れる。とはいえ、新「番頭」を迎えても、篠田氏は決して名目上のお飾りとはならず、自らが汗をかいてCSに関わり続けていた。実際に活動しているのは会員の一部に過ぎないとの直言、あるいは若手を少し厳しめの口調で叱咤激励している箇所をみれば、当時68歳、退職を一年後に控えた篠田氏のCSに対する愛情が伝わってくる。

篠田氏は手元のノート類を繰り、事実関係の正確な想起に努めながら話を進めた。セミナー閉会に際し、次号『キリスト教社会問題研究』資料編として、当日

の話を書き文章にまとめてほしいと依頼されている。これは実現しなかったが、代わりに、杉井氏が5年後に著した『30年史』のCS関係部分が、篠田氏の回顧談をよく反映したものとなっている。そのため今回掲載した記録は、『30年史』ひいてはこれを承けた『50年』によってすでに知られる事柄も多く含む。しかし、日ごろ人文研についての年史類を目にしない研究会員も多く、年史類には書かれなかった細かいエピソードや篠田氏自身の語り口・考え方も興味深いことから、既知の事実と新事実とを特に腑分けせずに公にしたい。事実関係に関しては、補足的に『30年史』をひもといていただければと考える。

篠田氏はもとより、CS創設メンバーの大半は天上の人となられた。司会者の杉井氏をはじめ、このセミナーでは新世代に属した方々にすら、お目にかかれなくなりつつあり、聞き取りを行おうにも、難しい現状がある。本稿を間接的な聞き取り記録として、現在のCSメンバーを対象とした「セミナー再演」として、あるいは機関誌への掲載企画が45年越しに実現したものとして受け止め、ご味読たまわりたい。

セミナーでは、篠田氏の報告に引き続き、A～D班の進捗状況・課題に関する個別報告（それぞれ杉井・土肥・和田・高橋の各氏が担当）、CS全体に関わる発題（杉井・太田氏）が行われた。各テーマについて興味深いやりとりも繰り広げられているのだが、紙幅の都合から、基本的に割愛した。ただそれぞれの報告にまつわる質疑応答のうち、CSの資料収集や全体的方向性について篠田氏の見解が示されている部分については、その発言に沿う形で抄録した。

記録中、発言者名は冒頭に記した。フロアからの質問者・発言者については、特定できない箇所も多く、不明な場合はすべて――で示した。小見出しを適宜付し、補足事項は〔 〕に入れて示した。フルネームは初出箇所にのみ補った。テープ起こしに際して行った文章上の修正あるいは中略など、編集責任はすべて田中にある。特に個別の研究テーマをめぐる議論は割愛しているので、関心をもたれる場合は、人文研所蔵の音源を直接参照されたい。

なお、記録に続き、〈解説に代えて〉と題する筆者小文を付した。また、人文研事務室の協力により、今年度に至るまでのCSの活動に関わる各種記録をまとめ、117頁以下に掲載した。〈解説に代えて〉の参考資料として、さらには、長く座右のCS基礎資料集としてご活用いただければ幸いである。

## 〈CSセミナー記録〉

### 開会の辞

**杉井** CSセミナーというような企画は今までなかったものでございます。従来、研究総会、合同研究会というものをもってはいたのですが、十分討議を尽くして、時間をかけてお互いが胸を開いて語り合うという機会也没有でしたので、是非そういう機会をもちたいという希望を申し述べましたところ、〔CSの〕運営委員会でそれがよしとされました。その運営委員会でも話が出たのでありますが、広く現在の日本の大学、小さく言えば同志社大学が置かれている立場から、CS研究会というよりは各学部を超えた共同研究会の態勢として、どういう風に大学における教育あるいは研究という問題を考えなければならないかという、非常に現実的な要請もあるわけです。しかしそういう要請とともに、CS研究会としては、今までの歩みというものを、あるいは当初に掲げた目標というものをもう一回確かめてみて、その反省の上に立って、今後の研究会の研究手法、運営あるいは管理という問題について、自由討議をしていただき、もちろんここであるひとつのものをきっちり確定していくという会議ではございませんが、今後の研究会の進む方向、具体的な運営、あるいは研究の方法につきまして、実りある成果を得られれば、お互いに幸いであると考えます。

今まで代表として、当初からずっとCSの歩みについて丹念に見続け、しかも指導し続けておられる篠田先生に、最初の発題者としてお話しいただきたいと思っています。

## CSの歩み

**篠田** 1956（昭和31）年にCS研究会が発足してから長い間、住谷悦治先生が代表者でございました。住谷先生はまさにCSの代表者というにふさわしい実質を備えたお方で、私どもは住谷先生の下に、大いに張り切って研究会の活動を始めたわけです。その初めから、私は「番頭」（と自分では言っていますが）として、住谷先生に代わって雑務の世話をする立場でした。現在も私自身は、気持ちの上ではその当時の考えをもっており、代表者というにはまことにふさわしくないのでございますけれども、会の歩みの詳しいことについては、一通り見て来たものですから、そういう立場でご報告をし、発題に代えさせていただきたいと思うのです。

現在、CS研究会の会員は50名近い40数名でございますが、その全員が本当に研究活動に日常参加しておるかという、そういう具合には行っておりません。三つか四つぐらいに段階が分かれています。三分の一か四分の一ぐらいは非常に活発に活動をし、日常顔を合わせて調査研究を盛んにしておる。いわばこのグループがCSを引っ張っていく、実質的なモーターとして動いているグループ。その次には、ときどき出てこられる方。そのグループ自体が自分の中にエンジンをもって動くというまでには力がないように思うのです。あとの三分の一の会員は、あるいはもっとかもしれません、名前を連ねているだけで、エンジンをもったグループの活動に引っ張って行かれるだけです。いわばトレーラーのようなものがあります。先頭に牽引車があって、後にヨタヨタモタモタと、長い荷物を引っ張って大通りを歩いているような状態です。このようなことを申しまして、御気に障りましたらごめんなさい。今日は、ひとつざっくばらんに言わせていただきたいのです。ですから、今後のCSというものを考える場合には、もう一度そういうヨタヨタとモタモタとするかたちでなしに、ぎりぎりの中みんなが問題意識をどこまで統一して、CSの十数年前、発足当時のような、活発な会員相互の団結一致ができていくか。そうできていくなら幸いだと思っています。これがまず、言

いたいことのひとつなんです。

「CSの歩み」というテーマを与えられたわけですが、発足当時から今日までの外面的な事柄を順を追うてしゃべっておれば、相当時間も必要といたします。短い時間のうちに、発足当初からハーバード燕京研究所〔Harvard-Yenching Institute〕の助成金が来た昭和34（1959）年頃までの状態を思い出しながら、二、三の点をお話ししてみようと思いました。十分な整理された原稿を持っておりませんので、少しこんがらがって申し上げるかもしれませんが、ご容赦を願いたいと思います。

一番初めに、発足当時の仲間の頭の中にあっただのは、やはり「平和運動」ということだったんです。具体的事実を申し上げますと、1955（昭和30）年の10月18日に、大山郁夫さんが学校に来られまして、アーモスト館で座談会がありました。そのときに、大山さんのお話もありましたし、皆さんのなかで、同志社の先輩の中には、浮田和民、安部磯雄、中島重、その他のような、社会思想・社会運動の方面で大いに活動した人があるじゃないか、そういう人の事績への注目がもっとされるべきじゃないか、というようなことがあって、これが私どもの気持ちに非常にアピールしたわけです。

越えて1956（昭和31）年の1月2日に、高屋定国さんの御宅に私参りまして、その時の雑談の中で申ししたのは、平和の会というのがありまして、平和運動（その当時はしきりにやっておったわけです）、平和の会もやらなくてはならないけれども、そういう社会運動的なことと並行して、研究活動を大いにやろうじゃないか、と法螺を吹いたわけです。研究活動のテーマとしては、例えば「宗教と社会変革」というテーマはどうだろう、そういうことを是非課題に、大学という機関の中におる者が大いにやろうじゃないかと気焰を上げたわけです。それがだんだん実を結びまして、井ヶ田良治さんがそこへ入って、1月の25日と思いますが、これはひとつ、文部省の科学研究費の中に基幹研究というものがあるから、基幹研究費の交付を申請しようじゃないかと、一晩大いに三人でもって語り合った

んです。それがどんどん実を結びまして、2月になりまして、いよいよ申請書を出そうということで、文章の達者な井ヶ田さんが調達の文章を書いて、井上新一さんが学事課の仕事をしておられましたが、彼にも相談して、たしか2月の上旬に提出いたしました。住谷先生をもちろん担ぎ出して、その他の先生にも大いにアピールして、みんなでやろうということになりました。まあ、大分話が大きいから、通るかどうかはわからん、通りそうにもない、という気持ちでした。住谷先生はおそらく、東京に行かれたついでにいろいろな人にも話されたのだらうと思いますが、私にはその事実ははっきり記憶がありませんけれども、意外にもこれが当たりまして、すでに4月14日の、研究会としての三回目の会合のときには、どうやら申請が通りそうだという情報が入りました。それは大変だというわけで、だんだんと研究会としての形を整えて、申請どおりだったかと思いますが、300万円の基幹研究費が大学に与えられるということが決まりました。

その直後に作成しました「同志社大学キリスト教社会問題研究会趣意」という刷り物がありますが、それに載っておりますところの会員は、敬称略で申しますと、研究代表者住谷悦治、研究会員和田〔洋一〕・田畑〔忍〕・岡本〔清一〕・秋山〔國三〕・嶋田〔啓一郎〕・住谷〔申一〕・安永〔武人〕・藤代〔泰三〕・小野〔高治〕・西村〔豁通〕・竹中〔正夫〕・小倉〔襄二〕・井ヶ田〔良治〕・高屋〔定国〕そして篠田。それだけの会員があったのですが、その趣意書の大体を読みます〔注：以下、当該趣意書は『30年史』の引用と同一の長文であるが、篠田氏がすべて読み上げており、再掲する〕。

「目的 わが国の社会思想、社会運動史上、キリスト教徒、とりわけプロテスタントの果たした役割はどれ程高く評価しても評価しすぎることはない。

自由民権運動、廃娼運動、無産政党運動、社会事業、消費組合、協同組合運動等、更には反戦運動のどれをとってみても、その出発点となり、その基礎となり、その担手となったものは多くプロテスタントの社会思想であり、社会運動家であった。われわれは直ちに島田三郎、小崎弘道、徳富蘇峰、



片山潜、安部磯雄、浮田和民、植村正久、木下尚江、西川光二郎、内村鑑三、吉野作造、石川三四郎等の名を想起することができる。著名な無産運動家の中に、その社会主義への関心がキリスト教的社会思想によって導かれた多くの人々があったことも周知のことである。日本の近代社会の特質から、神の御名において人間を愛するものは、彼らが、良心をもっていればいるほど、愈々日本社会の矛盾と日本社会機構の改変に心を向けざるを得なかったのだということができる。

このように日本の社会思想、社会運動史の上に看過できないキリスト教の意義の大きさにも拘らず、その研究はすぐれた篤志家の研究をもつのみで、系統的・体系的な研究は全く不毛のまま放置されているといつてよい。しかも、明治初年の先覚者とその生存中に接触していた人びとが、次つぎと物故しつつあり、現在この機を逃しては、その資料蒐集さえ困難を感じるのではないかとおそれられる。昭和34年（1959）はプロテスタント宣教100年記念にあたる。我々はこの100年記念までに、何とかして、これらの資料を収集記録し、後の研究にも資したいと考える。

幸いわが同志社は新島先生以来、ラーネッド博士、小崎弘道、宮川経輝、海老名弾正、山室軍平、柏木義円、岸本能武太、村井知至、湯浅治郎、安部磯雄、浮田和民、中島重等すぐれて社会問題に関心をもった先輩、先覚者を有しており、昨年で創立80周年を迎えたので、これを機会にこれらの資料の調査蒐集整理を行いたいと考える。」

次に「計画」とありますが、年表の作製、所蔵目録の作製、資料集の刊行といったことが列記されております。その後ずっとこの文章の骨子は受け継がれまして、さまざまな申請書に大同小異のことが盛り込まれておるから、皆さんご承知のことと思います。その当時は、最初、啓真館の一隅に部屋をもらいまして、高屋さんが係で、向かい側の研究所の本館の方からしょっちゅう出かけてくる。アルバイトとしましては、児島富美恵さんという法学部二部出身の女子の方に頼んで

やってもらってました。場所のことを申しますと、その後、たぶん昭和32[1957]年に新弘風館に移り、その翌年でしょうか、図書館〔注：現啓明館〕の新しい建物の5階に移るなどしたわけですが、そういう問題は省略しまして、ハーバード燕京とのことを思い出して、その当時の考え方を申し上げたいと思います。

昭和33（1958）年の4月19日に、大下〔角一〕学長がアメリカに短期の出張をされました。その時に大下学長は、このCS研究会に非常に好意をもって支持をしてくれたのです。渡米の機会に——例の最初の年にもりました文部省の基幹研究費は一ヶ年きりでありましたから、昭和32・33年は、外からの費用なしにやっておったわけですが——大下学長は、この研究について、アメリカで何とか研究費が得られるような話をしてしようということで、その点をお願いして、渡米の門出を見送ったわけです。4月の22日に、Harvard-Yenching宛の申請書を作成しまして送り、大下さんはアメリカ滞在中、当時のHarvard-Yenching Instituteのディレクターのライシャワー〔E.O.Reischauer〕博士に会って話をされたということでした。それが実を結びまして、その翌年の昭和34〔1959〕年の4月になって、Harvard-Yenchingからの第一回の助成が決定したということがわかったわけでございます。なお、その年になってから、現在のように、研究所の一部に編入されました。それまでは大学の研究所には所属しておりませんで、独立の、いわば私的な研究団体でございました。ただし、文部省から基幹研究費をもらう場合には、大学の方でその基幹研究ができるような設備、事務費とか雑費等は出す必要があるということで、大学の費用はもらっておったのですけれども、昭和34年に、たぶん4月以降、当時の所長は小松幸雄さんでしたが、研究所の一部に編入されたわけです。

ところで、大下さんがアメリカから帰られまして、5月2日に嶋田啓一郎さんと私とで大下学長に会って、Harvard-Yenchingからの助成金を受けることについていろいろ話をしたわけです。その時に話したことの一部をご紹介いたしますと、大下さんは、彼の考えもありまして、研究会の趣旨、活動の目的に

ついてこういうことを話したんだそうです。一つは、Christian Impact upon Japanese Culture——こういう一般的な問題、日本の文化に対するキリスト教の影響というような点。第二は、Relationship of Christianity to Social Problems in Japan——これはまさに、キリスト教社会問題ですが、その二つを話したそうです。大下さんは前者を強調してライシャワーに話した。ところが、日本に帰ってライシャワーの、あるいはライシャワーが代表する向こうの研究所の手紙を読めると、むしろ二番目の、日本の社会問題に対するキリスト教の関係、そちらの方の問題について助成をするというような返事があったのです。このキリスト教社会問題の研究というのが、まさに私どもが作成したハーバードへの申請書の内容で、Harvard-Yenchingでは、大下さんの強調した趣旨ではなしに、CS研究会が中心においた研究の趣旨の方を受け取って、それに対して申請をした——こういうことです。

その際、やがて問題になってきますのは、いわばCとSとのバランスをどうするかということ。これは例えば資料を購入する際に、絶えず問題になってきたこととございまして、高屋さんとか井ヶ田さんとかが社会科学の方で集めますと、社会問題の方の資料、社会主義とか無産運動とかいった資料がどんどん入ってくると。ひとつには、日本の文献の絶対量というものが、社会問題関係、Sの方が多いわけです。キリスト教のものは、絶対量が少ないし、また手にも入りにくい。そういうこともあって、自然とSの方がCをしのいで、Cの方がSの何分の一にしかならん。神学部の先生からは、よくその点で文句を言われたわけです。これは文句を言われるまでもない問題点でありまして、その点は今日までずっと続いていると思うんです。

私どもの当初のことを振り返ってみますと、今申しましたように、日本の平和委員会といいますか平和擁護の委員会といいますか、あるいは平和の会といいますか、今日のように二分あるいは四分五裂する前の状態、私はこれが一種理想主義的な平和運動だったと思うのです。むしろ今日のように七花八裂した方が、現

実的な平和運動の行き方であるかもしれませんが。そういう平和運動のハネムーンみたいな時代の雰囲気、同志社における平和運動という大きな流れのなかで、私どもは、大学というひとつの特殊な使命をもった研究機関として総合的に、しかも同志社というキリスト教学園の伝統の趣旨を生かして活動をやっている。これは非常にはっきりしておったと思います。今日ではそれがどうなったかと言いますと、皆さんがご承知のことですから、批判していただければ結構だと思います。

組織の点について申しますと、当初、私どもはもちろん構成員として、大学の教員ということが頭にありましたけれども、同時に同志社学園というものの、それから研究対象のことを考えても、同志社内における大学以外の学校の教員、それから職員、これも大学教員と同列に扱っていかなくてはならない——これは研究会としてはいささか例が少ないありかたではないかと思いますけれども、その点は非常にはっきり、皆が異論なく考えておったことでございます。今日では、「同志社内の教員」外の人をどうするかということ、例えば高屋君とか佐々木〔敏二〕君とかあるいは笠原〔芳光〕君といった人の処遇について問題があることは、ご承知のことです。もうひとつの今日以降の問題は、院生をどうするかということです。当初は、少なくとも大学教員と大学外の教員や職員は全部ひっくるめてやっ払いこう、そうでなければこの研究会の趣旨がうまく生かされないし、大学には教員が多いとは言っても、何しろテーマが多岐・多方面にわたっているから、到底同志社の大学の教員だけではまかないきれいなような分野があるということで、私どもは構成員の広さを考えておったわけです。

それから、組織と申しますと、例えば会長とか委員とか、会員とか準会員とか、そういう官僚的な組織といいますか、一般的には役割分割ということが当然なければならないのですけれども、そういう点につきましては、あまり細かい分割を考えてきておりません。私の立場だって、なるほど世話人、番頭、オルガナイザーではあっても、何らの権限もない、何かこうわけもわからず責任だけあって、権

限はない。権限がないことを名誉としておるわけですが、他の運営委員でも同様、グループの代表者でも同様で、何となしに皆が自然に仕事を分割して責任を担っておる。これは今までのところは目立った問題はありません。これは当初の考え方が、もともと平和委員会という活動の中での経験から出てきたせいであるかもしれない。そういうことでございました。

問題範囲について、初期の考え方をご紹介しようと思って、ちょっと調べてみたんですが、ごく初めの頃、こういう刷り物を作っております——CS研究会では是非収集せねばならない資料リストを各研究会でつくることになりました、と。たくさん分野を挙げているのですけれども、列挙してみますと、哲学・倫理・宗教・教育・文学・芸術・社会福祉・社会事業・協同組合・労働問題・矯風婦人問題・農民問題・未解放部落・少数民族問題・自由民権運動・国家主義・初期社会主義・反戦運動・大正デモクラシー・ファシズム反ファシズム運動・学生運動……もう、こうたくさん挙げてみたんですけれども、あまりに多すぎるということで、五つぐらいにまたまとめてみまして、第一分野が哲学・倫理・宗教・教育。第二分野が文学・芸術。第三分野が社会福祉・社会事業・協同組合。第四の分野が労働問題・矯風婦人問題・農民問題・未解放部落問題・少数民族問題。第五分野が自由民権運動・国家主義・大正デモクラシー・ファシズムおよび反ファシズム——それに無産運動とか初期社会主義運動とか学生運動とかが入りましたが、学生運動などはどこに入るか、いろいろ議論があってははっきりしなかったんです。こういう多数の分野を考えまして、それぞれの分野については誰がやってくれるかということで、大勢の人がそれぞれしかるべきところの責任者となって、これらの方面の資料を集めようと。具体的に言いますと、大部分は古本屋と連絡をとって、まず古書のマーケットから集めようというのが第一の仕事でございました。それに続いて、個人から所蔵品を見せてもらうとか写真を撮るとか、いろいろやってきたわけです。以上が初期の分野の設定でございます。

私はとにかく抽象的なことを言いたいのですけれども、二点ほど。第一の点は、

CS研究会のやり方が、実証的でなければならぬ。実証ということの意味がどういうことか、これがひとつの問題であります、少なくとも、一次史料というようなもの、原資料をできるだけ集めようと。そこで文献資料を集め、調査、聞き取りをやろうと。できるならいわゆる目撃体験、アイウィットネスといいますか、それをできるだけ資料にして、実証的に。ただし、これは私がその後に付け加えていることなんですけれども、実証というと、とかくいわゆる憲兵の立場みたいになってくる、つまり事件が済んだ後に徹底的に調べる。ところが実証と不可分の関係をもっている点として、実証は憲兵であろうとするのではないし、それではいけないし、本当に事件の実態をつかむのには、非常な制限ではないか。むしろ事件それ自体に自分自身が入り込むような、できるだけ共感し追体験し、それを現在の時点、将来の問題に生かしていくという心持が当然伴わなくては、実証ということも本当は成功しないのではないか——いわゆる憲兵問題ですね、これがひとつ。

それともうひとつの問題は、総合ということ。総合というと、とかくいろんな違ったものをバスケット、入れ物の中に入れる、入れ物の中にいれておけばそれで総合研究になる、ということになりやすいのです。しかし、もともと問題というものは、歴史的な事件については、ことにキリスト教社会問題については、異質でもあるけれどもそれは無関係ということではないわけで、先ほど挙げたようなそれぞれの問題分野が相互不可分の脈絡をもっている、その脈絡をどう捉えどう処理していくか。いろいろなアプローチの仕方があると思いますけれども、何かひとつの原理を見つける。社会学的・シンクロニックな行動関係をみていくのか、あるいはダイアクロニックな、通時的と申しますか時間的な推移の中でどのような因果関係がつながっていくのかというようにみていくのか。あるいはそういうことを離れて、アンクロニックといいますか、無時間的な意味関係で問題をつかんでいく、信仰論とかあるいは社会変革とはどういうことなのか、といった問題のつかみかたもあるかと思います。

アプローチのしかたは一元的に全部をまとめるということとはできないかもしれませんが、いろいろなしかたを通じて、各分野・各問題点を、それぞれのもつ内的な本質要素を分析し、かつ相互連関を明らかにしていくかたちで総合ということを目指そうと。少なくとも私はそういう問題設定をいたしまして、何か総合的な研究ということの実質を果たしていくべきではないかと考えています。これは言うべくして実は行いにくいのです。しかし絶えず、キリスト教社会問題研究会が総合研究会であるならば、こういった問題をお互いに討議して、単に我々が可能だということではなしに、日本の、世界の研究成果に対して、何かひとつの自己主張をしようような研究の方針が、我々の研究活動を通して実を結んでくるなら、非常に幸せではないかと。

私が申し上げてみようかと思いましたが、以上のいくつかの点で、要するに箇条書きに過ぎませんが、時間を超過しましたのでこれで失礼いたします。

### 資料収集・運営経費

〔注：以下、フロアとの質疑応答である。〕

—— この会を始められた頃、キリスト教と社会問題との兼ね合いという点で、先生ご自身としては、社会変革に対してキリスト教がのっぴきならない要素と考えられていたのか、もう少し自由な、両極にあるものとして楕円形的に両者はつながっていたのでしょうか。そのあたり、ご自身の意識としてはいかがでしょうか。

篠田 そうですね、私もそうですし、他の人たち、高屋さん井ヶ田さんの名前は出しましたが、ここにいらっしゃる小倉さん、いらっしゃる嶋田啓一郎さん竹中さん藤代さんその他、今でいう運営委員会的に動いた人たちの集まりでは、むしろキリスト教というものがなければ、日本の社会運動は起こらなかった、極端に言えば、それくらいの意識はありましたね。

日本の社会問題的な、その中にはいろいろありますが、意識なり具体的な運動・

活動というものは、キリスト教徒が起こしたと言ってもいいぐらいではないかという頭がありましたね。第一回の研究発表、会合としては三回目ぐらいだったと思いますが、昭和31〔1956〕年の4月16日に藤代泰三さんが、日本の明治以降の研究発表をやっておられます。当時、詳しい年表・資料を作成されまして、大いに張り切ってやられたという一例です。そういうことをみても、キリスト教にウエイトを置いて考えていました。ところが古書マーケット、古書業者からCS、キリスト教の資料を集めようと思ってやってみますと——具体的に申しますと、西北書房の塩谷君、それから、現在は洋書専門になっていますけれども堀、京都ではその二人に特に依頼をしまして、盛んに手持ちの資料や京都の資料その他を集めて、週のうち何回かは、この机がいっぱいになるほどたくさん本をもってきて、そのなかから抜いてこれとこれを買うということをやったんですが——キリスト教のものが入ってこないのですね、なかなか。

—— 入ってこないというよりも神学部にはすでにあるし、図書館にはあるしで……。

篠田 いや、そう言えないのですね、やっぱり。日本キリスト教ですから。神学部にはたくさんおありになるのですがけれども、日本関係の資料は意外とないのですね。むしろ同志社ではCS研究会がキリスト教のめずらしい資料を手に入れた、例えば『七一雑報』にしても竹中さんが神戸の方から手に入れてこられた、あるいは『福音叢誌』ですか、初期の資料についても、当時目ん玉が飛び出るほど高いと思った4万何千円かを投じて買い入れた。量的に言いますと少ないですけども、非常に力を入れて、キリスト教関係の資料は、集めるには集めたんです。東京と連絡をつけ、また東京であちこち走り回って集めても同様のことで、社会運動関係のものはわりと集まりやすい。たくさんあるからでしょうけれど。キリスト教関係のものはやはりマーケットにもないし、個人から手に入れるということもなかなか困難だという状況だったと思います。

—— 随分金は豊富であったとみえて、東京の〔東京大学〕新聞研究所の西田〔長



寿]さんのところに行って話したら、同志社と天理が東京にやってきて本を  
 どんどんいい値で買うので、我々は買いにくいと言うのです。

篠田 当時、基幹研究で1ヶ年に300万円を消化しなくてはならない。紙価を  
 考えますと、あの当時と現代とでは10倍以上、数十倍になっていますから、300  
 万円は案外使いでがったんです。そうかといって、一点一点値切ってというこ  
 ともできにくいのです。そこでなけりゃよそで探す、ということもいかん資料ば  
 かりですから、自然と値がつり上がるという格好になって、その点では同志社が  
 値段をつり上げたと隅谷三喜男さんも言ったし、鈴木茂三郎(あれはライバルだっ  
 たですから、集める方では)には恨まれたかもしれません。

—— 最初に問題の枠の限定を考えた場合に、CとSの縦横する部分が一番の  
 焦点になり、それに絞ってという考えはありましたね。ところが先ほど話された  
 ように、文部省やHarvard-Yenchingの話が出てきますと、相当大量の資金を動  
 かしていくわけです。資料を集めるという作業が始まって、その後領域が相当拡  
 大して、CとSとの厳しい接点を押さえて資料を選択するという展開ではなく、  
 とにかく集めていこうと。集めたものはおそらく直接間接に、CとSとの接点に  
 関する理解に役立つものであろうという、相当幅広い感覚でどんどんどんどん資  
 料が入ったという段階があって、現在のCSの資料がやばらついたところに若  
 干関係あるかと思いますね。

篠田 文部省の助成が決定してすぐ、計画書を出さなくてはならない。あろう  
 となかろうと、これだけのものをなんぼで買いますという予算書を出さねばなら  
 ん。そのためには、ありとあらゆる文献目録を探しまして、これとこれが要ると  
 ○をつけ、アルバイトをたくさん使って、その後火事になって焼けましたが西陣  
 荘というところで合宿をしましてね、そこでどんどんどんカードを作り、書  
 き抜いたわけです。そのなかでも、キリスト教文献の資料目録というのは数が非  
 常に少ないのです。そうかといって、300万円をとにかく消化しなくてはならな  
 いのです、しかも短期間に。消化しなかったら返すか何かであって、繰り延べは

効きませんから。そういうことで、もうまるで手探りに近いような形でやったという時期がありましたな。それぞれ専門家がおられますから、全くの素人がやるというわけではありませんが、短期間に人手もないのにやるということで、非常に急いで計画書を出し、購入の方も急いでやったと。それから二年間おいて昭和34〔1959〕年にHarvard-Yenching。その頃には、だんだん文献の名前もみんなが覚えてきましたし、じっくり構えてやれるようになった。今から考えると、私のような何にも知らない者がとにかく何となしに文献の名前を覚えたということ。私ほどではない人が多いのですが、当時はとにかく手探りのようなことでした。

—— 大下先生がライシャワーにChristian Impact upon Japanese Culturesという研究の方を強調して出したにもかかわらず、先方は社会問題とキリスト教というテーマに強い関心をもったということには、何か基本的な問題があるのでしょうか？

篠田 詳しいことはわからないのですが、聞いた話で覚えているのは、Harvard-Yenchingの基金を日本の方々の機関に出すわけですね、同志社では前に、中国の古典をたくさん集めた内田智雄さんなどの研究所もありましたね。その後、アメリカの世界政策、対日政策ということとも関連して、日本のことに重点を置いて仕事をしたい、と。それから、しかも現代といいますか近代といいますか、古いこと、何百年か昔のことになしに、近代のことをやりたいと。この二本の線から、日本の研究機関への助成が行われるのではないかと大下さんは言っておられましたな。果たしてそれが事実だったとみえて、大下さんの話に向こうさんとしては乗り気になった。

今のご質問はそのことではなくて、日本文化に対するキリスト教の影響という問題をなぜ除いたか、そちらの方には乗ってこなかったかということですね。そちらの方はちょっと私は説明できませんけれども、やはり同志社の特色ということを強調されたと思いましたな。同志社の特色を強調すると、何と言っても、社

会的関心の強いプロテスタントの人物は同志社関係が目立っておるから、そういうことにも関係して、同志社における日本国の近代キリスト教の社会問題に対する関係といえますか影響といえますか、そうしたテーマを向こうさんが取り上げた、という風に私は聞いたと思いますがね。

—— 「キリスト教社会問題研究会」という名前は、文部省に申請する時からですか？

篠田 申請書を見ないとわかりませんが、会という名前は申請には必要なかったと思いますね。代表者住谷悦治の名でいったと思います。基幹研究が下りてから、会と名を付けたのは、おそらく4月以降ではないでしょうか。

—— 研究会が出来てから一年ちょっとで機関誌が出ているんですけどね、わりと早い時期に。機関誌を出すというのは？いちばん初めは〔徳富〕蘆花の特集ですけれども。

篠田 蘆花の30周年、和田先生もお話しされたと思いますな。

杉井 私の感じでは、初号が出たとき、溜めておられて論文が出来上がっていたのが辻橋先生だったと思いますね。ちょうど蘆花の30周年の展覧を、恒春園から物を全部もってきてやっていましたね。本部から田中良一さん、校友では岩本博民さん、それから考古学の坂詰〔秀一〕先生が教室員を全部連れて、僕も辻橋先生も、あのとき年譜を徹夜で作りました。その頃もう辻橋先生の論文が出来上がりつつありまして、あと「蘆花瞥見」〔住谷悦治著〕とか和田先生の論文が1号に載っておりますね。

篠田 二年目、1957〔昭和32〕年にフォード財団に申請書を出したことがあるんですよ。当時フォード財団の非公式の派遣員ジョン＝スコット＝エバトン〔John Scott Everton〕という人、Ford FoundationのInternational Training & Research Programという仕事をする団体らしいですが、3月17日に来て、三ヶ年計画、一年ごと360万で助成をしてくれるように、という申請書を出したことがあります。エバトンさんには、住谷悦治さん竹中さんと私と三人、総長・学

長・理事長それから松井七郎さん（これはアメリカとの関係が深い）で会いまして、エバトンがCSの資料室などを検分に来た。これは認められなかったんですが、その頃には研究会という名前を使っていたんでしょうな。

—— 最初は会員から会費を取ってやっていたんですか？

篠田 会費を取っていましたな（笑）。

—— で、研究会の会費で機関誌を最初は出していたんですか？

篠田 いえいえ、それは何か雑費から……。

和田 会費を取っていないと会員意識がはっきりしない、てなことを僕が主張したように思います。会費を出されなかったらこれはもう熱意がなくなったんだという……扱いがはっきりしていますね。

篠田 文部省から金が来る前に、たしか住谷さんから10万円借りたことがあるんです。活動資金がないもんだから。返したはずですけど（笑）。

和田 機関誌自体は文部省からもらった金でやったんです。本買うばかりではいかん、やはり発表も同時にやっていかんということ。

篠田 機関誌の発行費は、基幹研究からではないでしょう。〔中略〕蘆花の記念行事は1957〔昭和32〕年の9月にやっていますわ。

杉井 機関誌初号は二回印刷しています。創刊号を出したところが、非常にミスプリントが多かった。それで、もう一回すぐ刷っています。だから初号というのは二冊、ちょっと違ったのがあります（笑）。

篠田 あんまりミスプリントが多いのでね、私はもう腹立ってな、花園ラグビー場で住谷さんに会いましてね、かみついたことがあるんですわ。真美印刷もあの当時はものすごく頼りなかったです。あれはもう知られざる……ほとんどわからんですけどね、ちょっと人が見たんでは。

杉井 そうですね……初号を持っている人はわかる。経費の面は、今はとてもそんなことは難しいですね、一回印刷したものを校正が悪いといって。もう少し同志社も大福帳であったのかどうか。

和田 同志社はそんな豊かなはずないですよ、そんなお金は出てこないでしょう。

—— 37000円ぐらいだったですか。ミスの方は、全部廃棄したんじゃないですか？ 最初300ぐらい？

杉井 持ってますよ、あれ（笑）。

—— 廃棄するから表に出してはいけないと言って。

篠田 アジア財団との関係がちょっとありました。アジア財団については、CSで申請書を書き、住谷悦治さんが向こうの人と会って頼んで、29万円ですか、それが結局岩井〔文男〕さん個人に来たというような理屈となりまして、それはここにいらっしゃる坂本さんがよくご存じですが、結局、最初の申請の仕事はCSがやったけれども、助成は岩井さん個人に来たということで、岩井さんの方でその費用は管理されました。しかし研究成果は、機関誌である『キリスト教社会問題研究』に発表されました。丹波地方の、先ほども杉井さんのお話のなかでご紹介があった詳しい調査をやって、その坂本さんが奔走された仕事は、岩井さんよりむしろ坂本さんの方がされたのかもしれない。ということで、CSはアジア財団からはもらっていないのです。いろいろ行き違いがあって、岩井さんとは親しまぎれによく議論したこともありましたが、結論はそういうことになったんです。校庭の石の上に長いこと二人で坐ってね、議論したことがあるんですよ。当時まだ岩井さんは宗教主事だったんです。その後、教員系統に移られて宗教学担当者として講師におなりになった。その際に、丹波地方のキリスト教の受容についての論文は高く皆さんから認められた、というメリットはありました。

—— CSの研究会が長続きたのは、基幹研究費が来たときに、それを各個人に配分せずに、ひとつにまとめたという点が非常に大きいのではないかと思いますけどね。

篠田 主としてよその大学について私が聞いたところでは、このような基幹研

究とかHarvard-Yenchingとかいう助成の場合、個人に割り当てて、個人のふところの研究のために消化するというケースが相当多いですね。ところがCSはそれを一切やらん。指定もできたのかどうか私は確認しておりませんが、それはやらないと。一切大学の経理を通して費用はみんなで使うという方針は厳守してきたんです。そんなことはせんと、という声も何回かは私の耳に入りました。ですけれども、私は今考えれば、CSが採ったような方針がよかったし、本来正しいありかたではないかと思っています。個人に分けることがいけないという意味ではありませんが、CSの場合にはそれをしなかったことがよかったのではないかと思うのです。それがやはり研究を総合してやっていくということに当然必要な方針ではなかったかと思っています。

—— 岩井先生については、あの本は前後五年で出たから、それで結果的にはよかったですけれども、原則的にはそういう形が望ましかったとは言えますか。

篠田 あれは最初の了解が不備だったんです。これは住谷悦治さんが窓口に立たれたんです。住谷先生はああいう方ですから、漠然と飲み込んでやられたので、結局岩井さん個人に来たということになってしまった。とことんまで岩井文男さんとは話し合って、お互いによく了解しています。随分侃々諤々やったんですけれど。

—— 岩井先生は丹波教会の牧師も兼ねておられました。

## 位置付けと所在場所

杉井 話は違いますが、CSができて上がるころ、同志社の中に、学部を超えてみんなで研究会というものを持つという何か切羽詰まったような情勢・認識があって、各学部から人が集まってきたというのでしょうか？

篠田 私は、今日最初に言いましたように、大山郁夫の座談会の時の印象、強い衝撃的な印象ですね。当時は平和運動というものが、分裂はてんでにやっておっ

たけれども、何となく元気がなかった。いろいろと組織としてやってみても、全学的な運動として大きく盛り上がらない。盛り上がるようで何か力が弱くて、じきに運動のエネルギーが萎えてくる。そういうことで苦悩していたんです。

—— 問題を提起され核になった方の思惑はどうか知りませんが、基幹研究は学部をまたがるものでありますし、この主題については関心をもっていろいろやりたいという人たちがリストアップされたというところがありますね。僕は同志社の場合は、大学紛争は関係ありますけれども、いわゆる講座制で非常に固い研究の枠がはまってきた大学ではなく、基本的にわりあい自由な研究体制があったと思いますね。だからやろうという形になれば、リストアップされた人が集まって研究グループをスムーズにつくるというムード、雰囲気みたいなものが同志社にはあった。それが幹部の方々のプロモーションによってここまで来た。それほど新しい研究体制をつくるという自覚的なものがあったとは何にも思えないですけどもね。理屈が後からついてきたという感じですね。

篠田 井ヶ田さんのようなクリスチャンでない人もいた。やはりみんなで「同志社」というものを考えようと。そうするとどうしてもキリスト教というものが出てくるわけなのですね。だから「同志社のキリスト教」というものを考えていく、それを時代の情勢のなかで生かすにはどうしたらいいかという意識はありましたな。だから、勝手なこと言ったら特に神学部の先生に怒られるけれども、神学部のキリスト教というものはどうだと。もっと自在に、澁刺としたエネルギーを発揮するようなキリスト教にならないだろうかとということも考えていました。

—— 研究所はその当時はまだ同志社大学研究所で、各共同研究への研究助成をやっていたんですね。その中からは1回はもらったんじゃないですか。全然もらわなかったのですか。

篠田 どうだったですかね。

—— 岡村〔正人元所長〕さんのときに研究調査部をつくりましてね。ひとつだけだったんです、最初は。「近代京都における社会発展の諸条件の研究」という。

ただそれは上からつくったもので、あの中で、政治行政班と伝統産業の班（西陣）と文化芸能班とあったのだけれども、結局続いたのは西陣研究だけなんですね。あとは上から作ったので全然発展せずに終わってしまった。それが一年ぐらい続いて、それから第2研究としてCSを入れていった、というようなことですね。

篠田 昭和31〔1956〕年の研究会が発足した当初、岡村さんに会って、便宜を与えてくれと願書を出したんです。岡村さんは大いに乗り気になって、援助しよう。研究所としてもはっきりした仕事ができうれしい、という考えを示した。研究所としては実質的な仕事がなかった。もちろんそのときは、研究所のなかの研究会ではなかったですけども、実質的にいろいろな形で援助をし、研究所というものを使ってやってくれるならば、研究所の名前にふさわしい実質的な研究活動ができるから大変結構だということを言っていましたな。

—— 戦時中は同志社大学研究所。戦時中はほとんど何もせず、住谷先生が研究所の所長になったのが初めてで、それから和田先生ですね。そのときは工学部も入った研究所だったものですから、主に研究助成の配分機関で。

篠田 つまり大学の費用のトンネルみたいなものですか。その程度のことしか研究所自体としてはできなかった。

—— 戦争中は田村〔徳治〕先生とか園〔頼三〕さんとかいう人たちが研究所員だった。

—— 文部省からくる金を何とかするために作った研究所だったんです。

—— 田畑先生も入っていましたね。

〔中略〕

—— 31〔1956〕年当時は弘風館の二階か三階にあったんですか？ 僕が記憶しているのは、弘風館の入ってすぐのところにキリスト教関係の、例えば伝記だとかがずっと並んでいて、そのとき、31年以前からすでにかなり資料があったような印象があるのですが間違っていますか？

和田 それはいいですね。



篠田 31〔1956〕年は啓真館です。啓真館から弘風館に行って、弘風館から図書館〔注：現啓明館〕に行ったことはたしかです。弘風館の一番てっぺんからから下に降ろすのがやっかいだからというんで、井ヶ田式のロープウェーを開発し針金を引っ張って、上から今の商学部の事務室がある——あそこに旧弘風館が移転した木造の建築があったんですね——あの前にすべり降ろして、それを図書館に運んで行ったんです。

和田 啓真館の北側に研究所の土蔵の建物があった。

篠田 研究所は別棟ですけども、CSの部屋は、啓真館の西北の隅の狭い部屋だった。高屋君、児島さんはそこにいた。

—— 図書館に行ってからは、仲村〔研〕さんの奥さんの明子さんがやっていた。  
〔中略〕

篠田 「戦時下〔抵抗の研究〕」ということを出したのは誰ですか？

和田 わからんですね……「戦時下」というのはあの頃でもあまり使われないことばでしたね。『世界文化』の話は出ていましたね。

杉井 1958年9月に研究会「1937年の京都におけるレジスタンスの形態」。ハーバード申請の前。ところがこのときのシンポジウムがどうかたちであったのか、記録はないんです。

篠田 人民戦線問題は『世界文化』を含んでいたんだな、そうすると和田さんあたりが言い出した……

和田 58年といたらもう〔ハーバードに〕申請を出しているでしょ。

杉井 ハーバードに「戦時下」〔申請〕は出していないです。まだ七年目ぐらいですから。

—— 蘆花特集号の合評会をした直後ぐらいからでしょう、休みを挟んで。だから古い話ですよ。

篠田 最初に出来たグループらしいグループは、熊本バンドです。賀川研究をやりかけたけど、これは流れたんです。資料だけは充分集めたものの、研究会と

しては育たなかった。

—— 話はそれますが、内田先生がやっておられる東方研究、あれもHarvard-Yenchingのでしょうか。講演集も三、四冊出ましたでしょ。

—— 『ハーバード・燕京 同志社東方講座』といいますが。

篠田 それは関係がない。あれとは断絶しているわけです。

—— 東洋の中世、古いところの資料は、まとめて上立売の研究室にあります。

和田 あれは非常に閉鎖的で公開されていない。貴重な中国の資料を買われたのが現在残っているんですね。結果からすると、一名の教授が非常に利益を受けたということですね（笑）。

篠田 当時は講演会、研究発表会もやっておられ、本も出された。資料としては非常に立派なものが集まっているらしいですよ。CSみたいなボロボロのものではなく、きれいなものばかりです。性格が違います。

和田 五、六人の研究会は開かれておったんですが、同志社は一人、後は京大の小島〔祐馬〕さんの弟子とか数名が。それはそれで研究にはなっているのだけけど、せっかく同志社がもらったのに他の人はぼかんとしていた。

杉井 “Harvard Doshisha”ということばを名称に使っているので、台湾（台北はYenchingのエージェントのようなものですが）からの漢籍の注文などの手紙は、今でも全部CSに来てしまうんです。“Harvard Doshisha Institute”という名前が国際的に登録してあるんですね。今のCSは国際的に登録していないんです。正式な機関として学術会議に申請は出しましたがけれども、欧文に出ているものとしては、CSはまだオーガニゼーションとしては見られていません。研究所の研究部門に入って、独自の研究会組織としてやっていないので。

篠田 希望的な意見かもしれませんが、同志社全体のなかで問題を考えよう、研究もやっていこうという意識はかなりはっきりあったと思いますよ。「同志社」という範囲で考えていこうという気持ちはあり、ずっと続いていますね。ただ現在は、大学の研究所の一部門です。その点ははっきりしていますけれどもね。そ

れがいいのか、あるいは独立した学術研究団体としてはっきり登録するのがいいのか、それはまた別の問題になるのかもしれませんが。今後の問題ですね。

## 教会研究の今後

篠田 先ほど申し上げたように、一番初めから、CとSのバランスの問題がある。バランスとは言うが、実はCの方を柱として考えるべきではないかとの考え方があったわけです。ところがいろいろやってみても、なかなかキリスト教自体の研究調査、あるいはそのための文献資料調査の活動に特定のものが無い、という反省がひとつあったのです。そこへもって、一昨年、杉井さんがアメリカに行かれる前に、今後のハーバードへの申請をどうしようかと意見の交換をいたしました。そして一昨年の秋ですか、ベルジェズ〔R.Vergez〕というディレクターがやってくる時に、私どもには、これは何と言ってもCS研究会で大切なのは、キリスト教研究を前面に出して、あたらしい申請計画のなかでこれを第一のテーマとして強調して、向こうにアピールしようという考え方がありました。これは私の番頭としての立場から申すわけです。そして大いにベルジェズさんとは話合ったんです。必ずしも、助成金をもらいたいから向こうの気に入るようなテーマを設定したというわけではございませんが、やはりこれは強調した方がよらうと意識はたしかにありました。たしかに私たちは社会問題はやっているけれども、何と言ってもキリスト教徒の社会問題が主なのだから、そちらの方からひとつ研究してかかろうではないか、それが同志社のCS研究会の特色でもあるし、思い上がったと言われるかもしれませんが、大げさに言えば、日本ならびに世界の学界に対して貢献しうるひとつの道でもあるだろう、これは我々がやらなくてはできない仕事ではないだろうか、という意識はありまして、教会研究というものを特に強調して申請をいたしました。

あらたに申請が認められた以上は、これを正式に第一のグループとして立てて大いにやろうということで、予算面でも配慮を加えてもらって、昨年の6月から

でしたか、高橋先生をキャップとして、現在12名ほどおります。一応資料収集活動については、相当盛んに行動し、殊に各教会の所蔵資料の徹底調査という、従来いかなる研究者もやっていなかったような仕事をやりまして、多量の写真・マイクロフィルムなどを集めた。これはCS研究会の趣旨から言っても、広く言えば日本の近代化の研究活動のしかたの上から言っても、間違ったやりかたではなかったのではないかとと思っています。

研究発表ということでは、今のところ活字になったものは至って少のうございます。先ほど話題になりました丹波地方とか岡山とかについて行われましたが、過去のことですから。研究会発足後は特に申し上げられるような研究発表には至っておりません。資料収集にエネルギーを取られまして、杉井さんなども、ほとんど教会から借りてきた資料の整理・マイクロ化に忙殺されて、昨年暮れ以来数ヶ月を過ごされたような次第です。

杉井 関係したことで言いますと、先ほどからのCとSとの資料の収集についての問題、キリスト教関係の文献や原資料の収集については、古書業者という正規のルートの手を通して得るものが比較的僅少であったという、出だしからの問題があったと思うのです。今、篠田先生がおっしゃったように、第六次のハーバード申請をするにあたって、CS研究というものが今後もお永続的にテーマを掲げて続けていくには、教会研究があるのではないか。日本のキリスト教会が持っている資料は、各教会がいわば責任をもって保管をしています。その保管されている資料の内容、あるいは質的な問題は、一部の地域においては検討がなされたことがあります。教団の援助を仰いでなされた、大内三郎さんの東海教区の教会資料の調査研究というものがあります。しかしやはり、一地域であるということとともに、一過的にぱっと見て目ぼしいものを拾い上げたという収集のしかたであったわけです。その点、同志社のこの研究会においては、原資料の収集が非常に大きな目標でありました。各教会の所蔵する原資料は、教団が責任をもって集めるということなどはしていませんし、この際、同志社のCSに来れば、日本の

キリスト教会の原資料が全部見られる——大法螺を吹いたら、そういう資料センター的な性格というものも持てたら持っていくべきではないだろうか。同志社の名において、キリスト教に関する活動の明治以降の資料はまとめておくべきだろう、という意図もあって、先ほど篠田先生のご説明があった申請もしたわけです。

ただちょうど向こうに行っており、ジェントルさんにも会いまして、そうしたら本当に全部集めるのか、と聞くわけです。いや、実はそういうことは考えていない、と。では今まで何をやったと言うんですね。その段階までに集めたものは、同志社教会の一部と浪花教会の全部だけでしたので、一応、congregational churchのものを集めていきたいと、ベルジェズさんに嘘をいったわけです。それはよかろうと向こうでも言っていたのですが、現状では、さっき土肥先生からご説明があったように、教会社会研究的な方法をとっているのです。だいたい三つの方法的なテーマというものを考えている。その三つのテーマに基づいて、各教派がいわば出揃っているわけではありませんけれども、非常にたくさん出てきているわけです。メソジストあり日基あり組合あり、バプテストあり長老派あり。そういう点では、先ほど高橋先生のおっしゃったように、総合性というものを、CSとして持つばかりではなくて、教会研究の中に当然持ち込まなくてはなるまいと思っております。資料収集だけでも、各教派の収集のしかたに浅深あるいは厚い薄いという度合いがあるように感じております。その点、今後どう進めていくかは、皆さんのご意見をお聞きした上で高橋先生のほうでおまとめになっていかれると思います。

篠田 エピソードですが、教会の牧師さんによってはこのようなことを言う人もあるのです。伝道にはもう古いものはいらん、伝道とはいつでも前向きだと。牧師が新任してきてから、古いものはみな焼いてしまったというところもある。極端な場合、そのような教会もあるし、それにはそれで多少の意味はあると思うのです。もちろん古いものを非常に大事にしている教会もあります。いろいろな教会があって、必ずしも古いものは必ず保存されているという前提では仕事に

かかれなわけですね。資料収集者としては、一定の方針が立ち手づるがあれば、今日のように非常に変動する社会ですから、いつなくなるかわからないから、できるだけ早いこと資料は集めていくということがいえると思うんですね。地域を限定はしても、しらみつぶしに教会を訪問して集めていこうということをやっているんですね。

土肥 三田に行ってみましたら驚くなかれ、三田公会日誌というのがあります。創立当初明治13年から18年、これはすごいものだと思うのです。創立当初（明治8年）の頃の印刷になっているものは少なくとも横浜の教会だけです。杉井先生の課者の研究やミッシヨナリーの研究レポートはある。日本の教会の人たちの手に成るものは、横浜の教会のものしかない。そうすると三田のには大変な価値が出てくる。明治10年代は日本のキリスト教が朝日の勢いで伸びていった時代、そういう時期の三田教会のものは何としてでもそこに保存しておいてほしいし、そのコピーとかも同志社で。関連して、三田教会を考える場合は、神戸教会を考えなくてはならない。大阪教会、浪花教会、天満教会、それから京都の一、二、三教会。すると僕は、ひとつの大きなジャンルとして、地域的には京阪神、我々のお膝元ですね、教派的には組合教会を一視点にして、洗っていくと非常におもしろいものが出てくるのではないか。浪花教会が出た、三田が出てきた、関西地域の、あるいは京阪神の教会史、もう少しそのあたりを丹念に調べていったならば……。

三田教会について申し上げますと、明治10年だったか、会堂建築をほとんど自分たちの力でやった、ミッションの手を借りずに。そのあたりの募金の名簿、会計簿が明治から大正にかけてかなり残っているんですね。会計簿をみると、どういう階層の人たちが教会を担っていたかがよくわかる。その当時、若林さんという藩医の三代目の蔵が焼けないで残っているんですよ。しかも三田教会の創立者の一人ですね。もう一人あるんですよ。大阪や神戸だったら焼けたりしているけれども、三田は残っているんですね。そういうところを調べていくと教会資料が出てくる。しかもこれはおもしろいことに三田教会の特色でもあるんだけど、

非常に優れた実業家、北海道開拓の先駆者が出ていますね、鈴木清の赤心社。九鬼〔隆義〕というのはとてもモダンな人で、随分モダンな社会が出てきている。わりあいには近代的なコミュニティとキリスト教が結びついている。僕はあいうところを見ていて、地方社会における明治の当初のキリスト教の動き、地域社会の近代化がどうなるのか、と。三田教会の場合には、そういう有能な人は皆三田を後にして出てしまう。だから三田教会は閉塞してしまって、明治20年代においては完全にミッションから援助を受けなくてはならない小さな教会に転落してしまうのです。しかし明治10年代を調べていくとものすごくおもしろいものが。蔵があるというのが僕には愉快で、期待をもったんですよ。

篠田 元良（杉田）勇次郎が三田だったかな。だいたい灯台下暗しで、京阪神がどうも後回しになっているんです。

杉井 実はこの間、笠原さんのお供をして神戸教会に行きました。小磯良平のお母さんが旧教会員なんです。小磯家に所蔵されていた教会月報が初号から昭和何年まで揃っていたんです。神戸教会は完全に焼けたり、戦争中は一部軍に使用されたりしましたので、教会の資料は何もないのです。あそこの教会の主たるメンバーであった松山高吉の日記も、神戸女学院にあるような状態で。その点では、三田教会は私も見たのですけれども、摂津の第三公会としての古い資料を一番たくさんもっていますね。浪花教会に手を付けたのはそういう意図ではなくて、澤山保羅の研究がテーマになっていたからですけれども、浪花教会の資料を整理し、全部マイクロフィルムに収める過程で、神戸教会、三田教会、それから大阪教会、もっと言えば実は同志社、平安教会というようにまず膝元から始めなくてはならない。私などの立場からしますと、もちろん高橋先生のお名前での教会研究班の依頼状を出すのですが、いきなり行くより、誰か神学部の方がおられますとより有効な資料収集ができますので、その点はよろしく願いします（笑）。

土肥 多少言っておいたんです。絶対大事にしてくれ、一枚何千円するから、と。しかるべく二人の蔵を持っている人に言っておいてくれと。いずれあらため

てCSから出かけるから、ということ。

—— 早くしておいた方がいいですね。特に個人などが持っている場合には、いつどういことが起こるかわからない。

土肥 我々が独占するつもりはないですが、CSが印刷して出してオープンにしたってかまわないと思うんです、三田の人たちに理解していただいてね。

杉井 三田教会の初期に澤茂吉というのがいますね。あれは同志社の初期の外国側に対する責任者ですからね。前神醇一と澤茂吉が新島と三人並んで、外国、アメリカン・ボードに対する責任者です。澤茂吉などは同志社の歴史ではひとつも出てこないのです。しかしアメリカン・ボードの記録では明らかに澤茂吉というのが出てきます。ラーネッドの記録に出てくるのは明治9〔1876〕年ですね。

〔中略〕

そういうお話をうかがうにつけても、教会社会研究のひとつのフィールドを重点的にコンセントレイトしましてね、やはり京阪神、同志社として資料収集が非常に楽というか便宜をもっていますのは組合派ですから、そういうところに次第に研究の、あるいは資料収集の重点を置いていくこと。もちろん方々に散らばっているものも、各地域の研究、例えば松本平の研究は、まだ戦時下の研究といっしょにやっていけるとは思うのですけれども、今は非常に手を広げている印象ですね。

土肥 京阪神ということ、しかも組合教会ということを考えると、具体的には笠原さんは神戸教会。

篠田 河崎〔洋子〕さんが平安教会、下調べしたんじゃないかな。

土肥 平安も大分あるらしいですね。坂本先生は同志社教会（笑）。やっぱりそのあたりまとめて地域社会研究を組織しないといけないなと思っていますね。

篠田 土肥さん、兵庫県含めての京阪神の組合から手をつけて、研究のグループ、実践部隊を組織して下さいよ。ちゃんとこの地域のことをこれだけの者がやりましょうとまとまらないと。今のところは僕が連絡役になっているような状態



だから。

土肥 松本平のことは二、三の人がやってらっしゃるでしょ。

篠田 ありやまだまだ（笑）。僕に言わせりゃ、海のものとも山のものとも……ボーリングです（笑）。京阪神はボーリングの段階ではないです。これはちゃんと鉦脈があると。だからどれだけの機材を投入してどれだけの人員を投入すればこれだけの成果が挙がるという検討がついているんだな。これは親玉に言うことだけれども、実践活動部隊を。

土肥 まさにお膝元、地域的にも教派としても、我々こそがそれができる。人材と機材をつぎ込めばできると。

篠田 今度助成金がきたら、ひとつ具体的に考えたらどうでしょうか。だから教会班として方針を確立してやな。難物だと思うけれども。

土肥 今の段階で教会研究グループを京阪神に限定することは難しい。これまでやってきたこともあるから。

篠田 限定しろと言うのではないですよ。時期をみて発足されたらどうか、と。

土肥 かなりそれはできそうであると。三田教会の日誌には本当に感動しました、近年にないことでした。

篠田 CSの特色を十分に発揮してやったのは、浪花教会だけなんです。下調べがかなり済んだのは、三田は別として大阪教会です。ここは全資料を点検しました。これはずっと昔、十年ほど前のことですけれども。市川〔恭二〕さんのところ。坂本〔松本雅太郎カ〕さんという亡くなった人が、戦後（この前僕らが行った頃は存命中でしたが）、丹念に整理して。宮川〔経輝〕の聖書とか、巻物にしてあるぐらい整理してあるんです。一部、『大阪講壇』だったか『基督教世界』だったか、借りてきて見たことがありますけれど。あそこも資料的にCSの所蔵に加えるとなれば、大量なものがある。箱だけでも全財産投入してもいけるか、ものすごくある。教会にあるのと信者の家庭にあるものとかがある。例えば島の内西原〔勇〕さんの関係をみると、信者のところにあるものもありそうですね。それ

から天満教会も多少ある。まだボーリングまでっていないけれども。

### キリスト者を評価すること

〔注：しばらくすると、前日の杉井氏発題「CS研究方法に関する一試論」についての議論が再浮上した。そこで、「試論」報告の必要部分を挿入した上で、篠田氏の発言を収録する。〕

杉井 機関誌の論文については、今までいろいろな批判があったと思います。やはりCS研究会という枠の中で出来上がってきた論文で、少し甘えている感覚が指摘されたように思いますが、機関誌についてはしばらく措きまして、みすず書房から出された4冊の書物について、一般的評価・批判に共通している問題があると思います。4冊目はまだ出されたばかりでありますから、どういう評価が3冊目と合わせて出てくるかは不確定であります。最初に出しました刊本は、『日本におけるキリスト教と社会問題』（みすず書房、1963年）です。住谷悦治先生編という形で、機関誌の論文を八、九分通りそのまま収録した。一番なるほどと思いましたのは、東大の隅谷〔三喜男〕さんの批判でありました。論考のなかから、坂本さんの取り扱った丹波地方におけるキリスト教の受容過程という問題と、（私のことを言って恥ずかしいのですが）横浜の第一公会（海岸教会）の成立を扱った、課者報告からみた初期教会の形成過程について、隅谷さんが言っておられたことは、実証性、具体的事実の発掘という点で有益であるということだった。その他については、あまり大きな批評はなかったのであります。

二回目に出した書物は、言うまでもなく『熊本バンド研究』（みすず書房、1965年）であります。一般的には、従来未発掘のものを発掘したという実証性とその集合性において評価されたように思います。しかし、どこが欠けているかを非常にはっきり指摘したのが、学習院の飯坂〔良明〕さんでありました。一つは、儒教との結合という問題が真っ向から取り上げられていないということであったと記憶しています。すなわち日本のキリスト教における儒教との接続は、取り扱った論文

はあったのですけれども、バンド構成員の各人を扱った各論のなかで、各日本の儒教と西洋キリスト教思想との接続がいったいどうものであったかという追究が一貫して欠けておる、と。第二には、これは熊本バンド研究の一番大きな欠陥、ミスを指摘されたと思っていますが、『六合雑誌』関係のビブリオグラフィの原稿を全部つくっておきながら、後ろに付けた文献目録に収載しなかった。共同研究のミスとしては、基本的な手痛いところを指摘された。これは大内〔三郎〕さんが非常に残念であると指摘されました。したがって、二冊目に寄せられた批評も、実証性と個々の史実の集合性については業績を買いながら、いわゆる総合性、あの時代における史的事実についての総合的評価にまで及んでいなかった点が指摘されたことでは、第一の本と同じでありました。第三は『戦時下抵抗の研究』〔みすず書房、1968～69年〕であります。非常に多くの方々から批判と紹介が寄せられたのはご承知の通りです。これを述べることは私の任ではなく、和田先生から後でご発表があると思いますが、私なりに感じたところでは、事実発掘と言う点において非常に大きな寄与をしているという点が、共通の評価の基盤であったと思います。

すなわち、一冊目から三冊目を通貫して、CS研究会のいわゆるメソドロジカルな問題というものを、もう一回この辺で突き止めなければならない、突き止め得ないにしても、もう少し苦悩しなくてはならないということを世の中の人から問いかけられていると思うわけです。そういう立場に立って見て、最初に篠田先生が指摘されたような、資料収集においても、研究の領域においてもCとSとのバランスというものが、アンバランスということで問題になってきていた、当初から。そういう傾向は、今もって引き継がれている問題だというご指摘があったわけですが、それに関連するようなかたちで、私が、歴史をやる者がこういうことを申しても、自信というものはひとつありませんし、高橋先生のおっしゃったトレルチやマックス＝ウェーバーの理解を咀嚼しているというわけではありませんが、こういうことも考えてみたらと思います〔注：ここでCについて

の正統派—自由派、Sに関わる体制への肯定—否定を座標軸とした杉井氏の見取り図が示された]。

篠田 正統派—自由派、体制に対する肯定—否定という軸の設定に際して、価値観があるのかないのか、というよりも価値観をどのようにして除きうるのか、と質問した方がいいんですかな。悪口を言うと「勤務評定」みたいになりかねないので……とかく議論をしていると、正統派はいい自由派は悪い、正統派は悪い自由派はよいと、点数を付けるようなことになりはしないかという問題なんです。

杉井 私は、コード的なものは立てなければならないと思います。しかし勤務評定的な考え方には反発を覚えています。CSと同時的に、あるいは向こうが先行したかもしれませんが、武田清子さんの研究が我々の前にあったように思います。ところが武田清子さんのキリスト教受容のパターンとか、やがて修正して出された『土着と背教』〔新教出版社、1967年〕とかは、要するに、取り扱うキリスト者あるいはその周辺グループというものが正統的でないと、どうしても範疇に入っていないような一面を持っているように思うのです。武田さんのキリスト教理解は、言い過ぎかもしれませんが、「棄教してしまう」とか「挫折した」とか、キリスト教のグループにおいて、より正統であったものは誰であったかという護教的な立場があるように思うのです。

私は研究方法のなかに、護教的な立場からはもう少し自由なキリスト教研究というものがなければならない、その自由さが学問研究の出発点でなければならない、という反発があります。もし勤務評定しているとすれば、私の勤務評定は、「正統だから」というかたちでの勤務評定はしないという立場です—お答えになったかどうか。武田さんと一度やり合いましたら、あんたの理解は固すぎると思うのです。しかし論文を見ると、どうしてもそういう風にしかとれない面があるわけです。会ってみて話をすると、いや違うと言うんですが。

篠田 渡辺善太さんが、私が言ったのに近い質問をされました。正統派なら社会的関心を必ず持つと考えるか、正統派では持ちえず、自由派（ユニテリアンの

ような意味の)でなくては社会的関心を持ちえない、どっちと考えるかという、非常に鋭い質問と私は受け取ったのですけれども。

杉井 したがってこの間、戦時下抵抗の研究の研究班に出させていただいて、「〈キリスト教への信仰をもっているがゆえに、必ず抵抗という形がそこにある〉という判断が、当時の日本のキリスト教理解の上で正しいか、戦争を義戦と考える神学思想に立っている人もあるわけですが、その立場はどういう評価を受けるのだろうか、という疑問を持っています。戦争とキリスト教という課題があるならば、いうなればマイナスの面までもやってみたいと思っています」と申し上げたわけです。先ほど申したことと一貫したことと、自分では了解しているのですけれども。

#### 未着手のテーマ（１）－キリスト教主義学校研究

〔注：太田氏により列挙された研究調査対象項目について討論が進められた。〕

篠田 キリスト教主義学校、学校史の研究があまり行われていないので、是非入れてほしいとの希望を私は持っています。昨日取り上げた分野のなかで、少数民族とか未解放部落の問題はどうなるのか、キリスト教という柱を一本入れた場合に、これらの問題が果たして重要な問題になるのかどうか、賀川豊彦の事業の研究の中で問題になったことですが、一般的にどうするかですね。特定の研究者がなければさしあたり外した方がいいかと思っています。その二つの点、特にキリスト教主義学校については外さないで入れておいていただきたいという考えです。

杉井 従来のCSテーマに掲げられていたのですが、ほとんど学校教育、教育史はできていません。資料としては、学校史はなるべく入れてはいるのですけれども、実際はほとんどなされていないわけです。例えばお膝元で焦点を絞るとすれば、同志社がある。CSの一部資料と、現在社史資料室がもっている資料とを連携をつけて保管をすとか研究できるとかいう体制がないと、社史という資料

のなかに収められているだけでは、死蔵される、ほとんど利用できないような形になってしまう傾向があるように私には思えるわけです。そういう点では、まずキリスト教学校史の資料の管理の面で、少し走った言い方かもしれませんが、現在の同志社社史史料編集所がもっているところの資料を、すべて人文科学研究所、CS研究会が運営・管理するという積極的取り組みも、これを研究対象にして研究体制が整えば可能ではないだろうか。その方が同志社としても成果が上がるのではないかと実は思います。

後者の方の問題は、研究所の中に資料部というものがあり、4、5年になるでしょうか、同志社で部落の問題を大学として考えなくてはならないという問題が起きたときに、人文科学研究所で部落問題の研究は行われているという名目で、図書購入費総額60万を年々研究所の予算の中にもらっていたわけです。その費用で部落問題関係資料を研究所の資料部で取り扱って、今まで購入してきました。この昭和44〔1969〕年度予算から、〔CSは〕別立ての図書購入をするという形ではなくて、一般的に資料購入ができるというしくみに少し変革をして、したがって、古書店で水平運動関係の資料が出ますと、うちでは買わないで、資料部の方で買ってもらおうというしくみになっています。資料収集の面では分担があるんです。ただ研究対象としてどう組み入れるかということの方は、CSの中で考えてもらわなくてはならないことです。

—— キリスト教学校の研究は必要だと思っています。ある種の段階で再整理することは、皆で一遍考えてみたらどうかと。

篠田 教会研究をやっていると、どうしてもキリスト教主義学校の研究の必要が出てきます。各学校の刊行した年史は、教会の年史と同様に、目につき次第集めてはおるんです。問題意識と体制とを今後はもう少し突っ込んでやっていかなくてはならない。そのなかで同志社という特別な関係がある対象が入ってきますが、同志社のことは別個にグループをつくってやっていかなくてはならないか、これは先ほど杉井先生が説明されたような事情も考えますと、差し迫った問題で

もあると考えます。

〔中略〕

学校研究について、広島女学院の場合、非常に重要でありそうだったのは、地域社会との関係ですね。広島は軍隊、官庁関連、大工場関連の子弟が学校に入ってくる。社会学的とでも言うのでしょうか、地域社会との関係という角度から、学校の整備・発展を考えるべきではないかと痛切に思いましたな。同志社の場合には薄いですが、大多数の地方の学校は、地域社会との関係が深いと思いました。そういう点では、他の観点からでもそうですけれども、社会学系統（社会学といってもいろいろあるんだそうですが）の人にもっとCS研究会に入ってもらいたいわけなんです。最近は数名入られましたけれども。

## 未着手のテーマ（２）－社会事業家研究

杉井 当初掲げられて今まで手を付けられていない研究テーマについてはいかがでしょうか。

篠田 山宣〔山本宣治〕については今年の４月頃から研究会を数回開催しています。何分にも研究会員のなかで山宣研究を実際になさっている人数が少ないものですから、もうひとつ景気がよくないんです。賀川豊彦の資料は、少なくとも単行本については、よその大学の研究所の人も同志社にはあると言ってくれる。その他の雑誌・パンフレット類となると、あるとは言えない。膨大なものになる。最近でも、2000万円という声が出るぐらいの資料の収集の話がありましてね、とてもとても日本では調達ができないのであきらめたんですけれども。

あれの行方はその後、確かめておりません（笑）。横山春一さんが個人的に収集したものです。単行本は同志社にも相当あるわけですからとりたてて考えるほどのこともないのですけれども、雑誌・パンフレット類ですね。そういう種類のもを実に丹念に集めているんです。膨大なものです。かさはそうないのですが3500点。古書店は通さず、金はないけれども欲しいと手紙を書きまして。全集、

あれは読み物ですから、あまり言うと差し障りがありますが、一言で言えば研究資料にはならんと私は言っているんです。大衆が修養に読むように24巻、アレンジ、書き換えてあります。それはそれで意義があると思うのですよ。

杉井 賀川豊彦という名で出た刊本はCSで比較的集めてあるのですが、それを集大成したようなものですね。

篠田 賀川の本というのは、同じ本でも第何版何版と少しずつ違ったりしているんですね。そういうきめ細かな研究用の材料にはなりません。

土肥 京大の人文研の松尾〔尊兌〕さんが、アメリカに行って帰ってきて、CSで是非とも賀川研究をやりませんか、やるんだったら私も二、三の学生を連れてでも協力させてほしいと言っておられるのですが、あの人なんかの問題意識から言えば、賀川などはどうしても本格的な取り組みが必要になってきているようですね。同志社のみならず内外でもかなり関心が持たれつつある、あたらしい評価がされようとしている。今後のひとつの大きな問題になるのではないかと思っているんですけどね。

篠田 『死線を越えて』でも、最初『改造』各号にて発行され、それから本になって第1版からあの当時150版ですか、版を重ねたでしょ。各版全部ではないにしても、いろいろな装丁、形の刊本を全部集めるということが、細かく考えれば必要になってきます。横山さんの集め方は、そのような考え方が入っているわけです。賀川さんは随分人に頼まれて、他の人の著書・翻訳書の序文を書いている。それがまた秀逸なもので、だいたい集まっている。私たちのところも少しは集めていますが、横山さんはそれを丹念に集めている。賀川さんは方々の雑誌・新聞類にもものすごい数のコラムを寄稿しているんですね。それが横山さんにどのくらい集まっているかは知りませんが、こういうものに目をつけて集めるということになるんですな。これは大変だというわけで、あまりに険しいから退却したような形になっていて。

杉井 実は、現所蔵者の横山さんが新しい事業を企画されて、そのための費用



として今まで収蔵されたものを是非売りたいというお話が二年前に始まった。あまりに膨大な価格で、日本側でそれを受け取られた方は、皆だめだということで、その話はアメリカに渡った。ところがアメリカ側で聞いた数人の方は皆さん、やはり日本に置いた方がいいという見解を表明されて、その後、ちょうど私も向こうにいましたので相談にあずかって、同志社に置いたらどうかという話をライシャワーなども非常に積極的に言っていたのです。しかし同志社としても、それだけの費用をポンと出すような態勢はとてもない。篠田先生のお力で理事長とも相談・交渉を試みたのですが、一応あきらめる、その後どうなっているかは私自身も知りません。アメリカ側で主として横山さんとの交渉相手になっているのは、ジョン＝ハウズ〔John F. Howes〕です。そういう状況にあって、篠田先生を中心に賀川研究グループが一時つくられていた時期もあったのですが、CSとして研究対象に設定するということになれば、資料の問題も関わり合いがありますので、状況を一応説明しておきます。

篠田 賀川関係の資料はまとまったものが方々にあるらしいのです。ですから細かく研究していこうとすると、そういうところをあちこち探訪してみなくてはならない。横山さんのところにもあるし、研究機関、西宮あるいは四国の郷里、協同組合関係の施設等、あちこちにある。例えば木立義道さんという東京の協同組合の大先輩も個人的に所蔵しておられるらしいですね。必ずしも賀川関係だけではないでしょうけれども、この人にもお会いしました。いちいち資料的に洗って、従来の賀川像を裏付けあるいは修正・変更していくことができるかもしれないですね、そういう資料を丹念にあたってみれば。私どもがやりましたのは、横山さんのところを訪問したことと、黒田四郎さん、東駒形教会の。あの方が賀川に一番最後までくっついていたのですが、話を聞いた録音テープがあります。その人が持っていた神の国運動時代の日記ですね。賀川の秘書として神の国運動で全国を歩いた綿密な日記があります。この日記は写真を撮ってCSにあります。そういうものはあるんですけどもね。

ご承知のように賀川は狷介ですから、側近の人が長く続かないわけですね。多くが反旗を翻して離れていっている。そういう人の下にもいろいろ資料があるだろうと思うんです。私どものように何も賀川とは関係のない立場の方が、かえって賀川との関係がどのような関係であれ、そのようなことは無視していろいろな人を訪問して、研究者として資料を見せてくれとか話をしてくれとか言えるんですけれども、賀川側近の人で、密着したり離れたりとくっついた人は、かえって賀川の研究がしにくいという状況があるのですね。ですから同志社という性格の学園は、賀川研究をやるには現在でもまだ、適当なシチュエーションをもっていることはたしかですね。

## 閉会に際して

〔注：その後、運営事務上の問題が討議されてセミナーはお開きとなった。〕

杉井 だいたい予定していた時間となりまして、総括は、次回のセミナーが開かれるような情勢に同志社もあることを期待しながら……。CSとしてはこうやって長時間にお互いが聞き合い話し合った時間はまったく初めてのことでありました。いろいろご発言いただきありがとうございます。

篠田 自由な放談だったような（笑）、したがって今日いろいろ決めなくてはならないこともいくつかあるようですけれども、それについての討議・決議等は省いた方が適当ではないかと思う。いずれ運営委員会などを通して、6月に入ればHarvard-Yenching の次回の助成が来るか来ないかわかるでしょうから、それがわかった頃に毎年のしきたり通りの総会を開きます。それまでによく話し合っ  
て総会の席で決定するという見通しでよろしいのではないか、今日は自由に話し合ったということだけで結構かと思いますがどうでしょうか。

太田 CSの伝記書を是非篠田先生に書いていただいて、『キリスト教社会問題研究』に資料編で掲載したいという気持ちをもっております。

篠田 一回では済まんよ（笑）。記録にところどころ穴が開いているので。一

番よう知っている高屋君がいないもんですから。

〔了〕

## 〈解説に代えて〉

「キリスト教社会問題研究会」は、戦後日本における平和運動のうちに産声を上げ、アメリカにおける日本研究の波に養われて歩き始めた——篠田一人氏の語りから伝わるCSの性格はこのようなものである。マルクス主義と近代化論という「偉大にして異質なる両親」をもつに至ったCSは、自らのアイデンティティをめぐる葛藤を抱えて生きることを余儀なくされた。しかし、この二大思潮の「幸運にして幸福な」めぐり逢いは、「同志社」においてしかありえなかった。本談話は、CSが極めてユニークな、唯一無二の歴史的結晶であることを印象付けるに十分な内容をもっている。

本記録のもととなった「CSセミナー」開催の時代背景を述べる。和田洋一氏が「文学部長との話が長引いた」とぼやきつつ遅刻して登場した理由は確定できないが、司会・杉井六郎氏の閉会の辞は、明らかに大学紛争の激化を意識している。『50年』年表によれば、約半年後の1969（昭和44）年9月、同志社大学は全学封鎖となり、人文研事務室も一時学外に移転した。そして、「本年度は、“学問とはなにか”を根源的に問いかけられた、いわゆる“大学問題”の嵐のなかで、各研究グループの活動は続けられた」（〈編集後記〉『キリスト教社会問題研究』第16・17号合併号、1970年3月）ため、「CSセミナー」は再び開かれることはなかったのである。

CSにかかわる状況について言えば、一躍CSあるいは人文研の名を高からしめた『戦時下抵抗の研究』（みすず書房、1968～69年）が公刊されたばかりであった。数年前には、『熊本バンドの研究』（同、1965年）も世に送り出されていた。創設より10年余りを経て、CSはいわば「確立期」を迎えたところであった。とはいえ、

記録からもうかがわれるように、二年後にハーバード燕京研究所からの助成が切れることがひとつの不安材料とみなされていた時期である。

ハーバード燕京研究所をはじめ、アメリカの諸財団からの助成が、CSの盛んな活動を可能とした点は、戦後歴史学を担った諸団体と比しても、個性的な側面であろう。同志社とハーバード燕京研究所との関係はCSに限るものではなく、全学的な「ハーバード燕京委員会」が組織され、本記録中の中国関係典籍購入問題も、そちらに由来すると思われる。ともあれ、「資料収集史」として多彩なエピソードを含む本記録であるが、特にアメリカ側との具体的な関係に言及がなされている点において貴重なものである。

CS発足のきっかけは、少なくとも篠田氏の主観においては、1955（昭和30）年10月18日の大山郁夫学内講演会であったという。大山は同年11月30日に亡くなっているから、まるで遺言として同志社に蔭かれた種が、CSとなって発芽したかのようである。ただ「はじめに」で述べた竹中氏の「序言に代えて」は、篠田氏のように平和運動と結びつけるかたちで創立経緯を叙述してはおらず、またフロアからも、平和運動との関係ではなく同志社の学問的気風の産物と捉える発言もあり、立体的な解釈が求められるところではあろう。

さて、本記録を一読すれば、当初のCSの活動が何よりもまず「資料収集」であったこと、それはセミナー開催時にも会員の共通志向として受け継がれ、「何を集めるか」が議論の中心になっていたことがよくわかる。一例として、京阪神一円の組合系教会を悉皆調査することの重要性が指摘され、話が盛り上がっている。具体的な調査対象のひとつに挙げられている平安教会に関しては、本年（2014年）3月、第18期第1研究「近代日本とキリスト教」の活動として、設立以来の資料を借り出し、整理を始めたところである。当時は烏丸三条にあった教会が岩倉に移転してすでに40年になるが、資料は無事に所蔵し続けられていた。半世紀越しの課題とは知らずに着手したが、往時の思いを引き継げたことに淡い感慨を覚える。

現在のCSが、「資料収集」の初心にもう一度立ち返ることは有益であろう。資料の複製技術は、当時から考えると飛躍的に進歩している。一次史料を中心に、人文研におけるCS所蔵資料の把握と今後の収集課題の整理、そして対外的なアピールが望まれるのではなかろうか。杉井氏は「日本のキリスト教会の原資料が全部見られる資料センター的な性格を持っていくべき」との夢（「大法螺」）を披露しているが、全部とまではいかないまでも、せめて組合教会系の史料所在の確認と収集、公開態勢の確立は、実現可能な目標として、今日あらためて追求するに値しよう。

杉井氏の在任期には、海外からの客員研究員が相次いでいる。それは第一に、杉井氏個人を慕ってのことだろうが、人文研が近代日本プロテスタント研究の魅力的なセンターであったがゆえでもあろう。今日も当分野においては、世界でも有数の環境である／たりえることを忘れてはならない。2013年、CS企画として、国内外の関連研究者を招いてカンファレンスを開催したが、書庫を案内すればどんなでも一様に感嘆の声を上げる。このようなところでゆっくり研究に没頭してみたいとの感想をもらされることもある。内外の客員研究員を積極的に受け入れ、資料を十分に活用していただくこと、その成果を研究会に還元していただくことが、CS活性化に向けてのひとつの有効策と考える。

なおセミナー当時、CSは独自の規定を設けて分類を行い、図書は別置されていた。現在これらは統一的な分類の下、人文研蔵書として混排され、特にCSとしてのまとまりはない。だが、研究会の手によって作成された『キリスト教社会問題研究会所蔵文献目録』（1967年）、『キリスト教社会問題研究会雑誌新聞所蔵目録』（1970年）によって、当時の蔵書構成を知ることができる。本記録で言及されている中国関係の文献も、『ハーバード・燕京 同志社東方文化講座研究室旧蔵漢籍目録』として人文研が1991年にまとめた。

次に、CSの研究手法としては、旺盛な資料収集活動とあいまって「実証」が重視されたことがわかる。事実の発掘と集積こそがCSがもっとも外から評価さ

れてきた点だとの自己認識もあった。その上で、どう研究の総合化を図るか（意識すれば、どのような歴史像を出すかということだろう）という課題が意識されていた。篠田氏の姿勢をうかがわせる箇所が散見するが、その研究方法については、本誌7号（「熊本バンドの研究」特集、1963年）の冒頭に掲載された「思想史研究ノート」において、よりくわしく展開されている。

CS創設「趣意」は、本誌収録の最初のバージョンに少々手が増えられ、『キリスト教社会問題研究』第1号に掲載された。そこでは「研究範囲」として、「明治以降第二次大戦に至るまでの個人の伝記、社会思想、社会運動のうごきを総合的に研究する」ことがあらたに掲げられていた。しかしセミナーでは主に「戦時下抵抗の研究」の今後に関わって、戦後史にも着手すべきという議論に花が咲いている（戦後七十年を経た今日のCSより、むしろ戦後二十五年の当時の方が、「戦後史」への関心が高かったといえる）。折々に登場するそのくぐりや、今回割愛したが、いささか放談ぎみで、論点は拡散している。篠田氏は杉井氏とともに、CSの今の体制のままで戦後資料に手を付けること、戦後の問題に正面から取り組むことは、過去の実績を考えても困難であり別途追求すべきである、それは戦後を軽視しているからではなく、大きい問題だと思えばこそとであると、やんわりたしなめている。

運営上の問題としては、有志団体から発足したCSの会員や図書利用の範囲をどこまで広げるかが話し合われていた。フラットでオープンな体質が目指されているが、同志社に正規の籍を持たない会員や院生の扱いが焦点となっている点は、隔世の感がある。私見ではあるが、現在は、同志社人（同志社出身者）の組織であることを超えて、どれだけ社外研究者の力を集められるかが鍵となっている。

本セミナー以降、すなわち1970年代以降の活動については、「はじめに」で示した50号、あるいは杉井・田中両教授追悼号掲載のエッセイが種々に語るところであり、そちらに譲りたい。だが、とりあえず専任研究員の事績に沿うかたちで、2000年前後までのCSの展開について簡単に記しておく。CSは所外の研究員なく

しては存立しえず、言及不可欠な社内外研究者の顔が一人また一人と思ひ浮かぶ。だが、やはり、研究所教員の立場を有する者にしかできないことがあり、彼らの資質と裁量こそが、CS全体の行方を大きく左右してきたことは間違いない。

本セミナーの司会であり、CSの長期大黒柱とみなされてきた杉井氏の事績については、今回論じるだけの準備はない。だが、大まかに言って、1970年代半ばから1980年代末までは、杉井氏と氏を補けた田中真人氏によって、1990年代以降は杉井氏に代わった吉田亮氏と引き続き田中氏によって、舵取りがなされたと区分できるのではなからうか。

前半期には、すでに本記録で言及されている松本平や民友社の研究、『六合雑誌』『七一雑報』などジャーナリズム関係、そしてキリスト教社会運動者の留岡幸助、山室軍平をテーマとした研究がまとめられていった。初期からの研究課題であり、セミナーで話題となった賀川豊彦については、今もってまとまった書物を生み出せずにいるが、以上のいわばCSオーソドキシカルな方向性は、杉井氏退職後の90年代以降も、『新人』と『新女界』、石井十次、対天皇制の研究へと、田中氏の差配の下で花開いていった。

1976（昭和51）年に着任し、CSの世話役を務めた田中氏が、日本近現代史、社会運動・社会思想史の研究者であったことは大きい。その志向がおもしとなって、篠田氏が危惧したような、いわばゲッター化したキリスト教史研究あるいは自校史研究への転化が防がれ、外への回路・風通しを維持することができた。合わせて、Sを自らの本領としながらもCをないがしろにせず、CSの芯をねじ曲げようとしなかった田中氏の絶妙なバランス感覚は、得難い特性であったと考える。生前の田中氏よりCSへの参加と協力を呼びかけられたとの声を、特にキリスト教に関係する分野の学内教員からしばしば耳にする。

『同志社百年史』は1979（昭和54）年に刊行されるが、CSセミナーにおいても、並行するその編纂事業はすでに意識されている。百年史の編集・執筆委員がCSのメンバーとまったく重なっていたわけではないが、続く『新島襄全集』（1983

年～)をはじめとする法人内諸プロジェクトの進行とともに、1980代以降のCSにおいても、新島襄・同志社史は重要な核となって現在に至る。セミナーにおいて課題視された「キリスト教主義学校史研究」は、同志社史に限って言えばかなりの程度進み、参加者の充実にもつながった。これからは他の学校をどのくらい視野に収められるか、言い換えれば、他校史を手がける研究者とどのくらい交流できるかが決め手になってくるだろう。

一方、セミナーにおいて問題視された社史資料編集室との連携についてであるが、この点は今日なお改善されたとはいえず、公的な意思疎通・情報共有の場もない。もちろん研究組織である人文研と、同志社の自己確認・広報的な機能を有する現状の社史資料センターとでは、簡単に合体できない面もあり、別組織体制を維持してそれぞれの目的を追求していく方が健全さを保ちうるともいえる。だが社史関連資料に関しては、両者合同の恒常的委員会を設置して知恵を出し合い、書庫の合体や共同整理など、建設的な方策を模索してもよいのではなかろうか。資料は多数・多様に利用されてこそ意味がある。他大学の制度にも学び、社内はもちろんのことであるが、より一般に開かれた資料の公開態勢確立が緊要であると思考する。

1989(平成元)年、杉井氏と入れ替わりに、アメリカで学位を得、社会史・宗教史の視座をもつ吉田氏が着任したことで、90年代のCSには清新な活力が加わった感がある。宣教師や教会といった「C」の核となる存在の研究がさらに進展し、「S」は従来のような社会運動的な含意を超えて、多様な研究方法・研究対象の選択を可能とする広義の「社会」概念へと広がったのではないか。

具体的成果の一つはアメリカン・ボード研究である。名誉教授となった杉井氏と吉田氏の尽力により、アメリカ研究所との連携に基づき、ハーバード大学所蔵の宣教師往復文書の複製を作成・所蔵しえたことは、篠田氏が指摘した「Cは集まりにくい」傾向を、古書店頼みではない視点の工夫と熱意とで払拭したものと考える。また、CSにおけるアメリカン・ボード研究のユニークさは、「ステーション



ン」という着眼点にあるが、本記録で力説されている京阪神の教会史の地域史的研究が、宣教師文書という別角度からの資料により、形を変えて実現したともいえる。

二つめが海外移民の研究である。1980年代に入り、機関誌にも関連論考が単発的に発表され始めるが、90年代以降は、専従研究員の研究や機関誌特集号のテーマとしてしばしば設定されるようになった。現在も、吉田氏の下でコンスタントにまとまった成果が公刊されており、今やCSの主要な研究テーマとして確立したといえよう。

以上、乱暴なまとめ方をするならば、1990年代以降は、田中氏と吉田氏が両輪となり、その異質性こそがよき方向に働き、CSの「広さ」と「深さ」が担保されていたと考える（「異質性」とは、両氏の個性のそれであると同時に、CSが誕生以来抱える、あの宿命的な「両親」由来のそれでもあった）。

だが、1996（平成8）年に文学部に転出した吉田氏（その後、新設の社会学部に異動）の穴埋めがなかったことは、「人文研の」CSにとって大きな痛手であった。そして皮肉にも、吉田氏が所外からCSを支え続ければ続けるほど、人文研所員でなくても学内の誰かがCSの研究を担ってくればよい／くれるはずという甘い認識が根付いていくこととなった。加えて2007年のCSは、吉田氏転出以降の10年を所内で持ちこたえた世話役・田中氏の逝去という不幸にみまわれた。これらの傷は今日にも尾を引いている。充実した資料をいくら誇ったとて、研究所内でのCSの立ち位置が不如意なものとなり、人の切れ目は、対外的にも縁の切れ目をもたらすことになる。

現在進行中の研究会と担い手については、後世の歴史的評価にまっところが大きく、ここでは総括を差し控える。とりあえず研究会の構成のみを示しておくと、CSの共有財産たりえる資料の収集・整理を司りつつ、オールCSサロンの性格を担う「近代日本とキリスト教」班が存在し、個別に移民研究・社会事業史研究・新島襄英文書簡解読の班が動いている。CSの歴史をふまえたそれなりに balan

スのよい配置にはなっていると思う。また、各研究会の活動を直接に反映したものではないが、前述した昨年度（2013年）のカンファレンス「ミッション高等教育の可能性」では、CSが誇る「戦時下抵抗の研究」やアメリカン・ボード研究の達成を、19～20世紀の世界史的視点からとらえ返すことを試みた。

このカンファレンスの具体的内容については、本誌前号（62号）を是非ともお読みいただくとして、概要のみ示しておく。第1部「アジアにおけるミッション高等教育史研究の来歴と現状」は、中国・朝鮮における研究動向についての講演会とした。第2部「越境する教育事業と「帝国」の時代」は、「帝国アメリカ」の伝道地アジアにおける女子教育事業を取り上げる基調報告に対し、イギリス帝国史・東アジア植民地教育史研究の立場からのコメントを仰ぎ、シンポジウムを行った。第3部は「戦時同志社史再考」と題し、短期共同研究を通して、人文研が上梓してきた古典の研究の視角・実証面における塗り替えを図った。同志社「神棚事件」（1935年）という一つの出来事を、内地および植民地台湾・朝鮮におけるキリスト教系学校をめぐる諸事件との連鎖的広がりの中に位置づけた。

以上のなかで、教育する側とされる側の論理（両者の反発・協同・妥協の様相）、学校の設立・運営および資金調達の形態、といった共通の追究課題を析出できた。

今後、カンファレンスの成果をどのように発展させていくか、そのための態勢づくりも含めて思案のしどころとなろうが、一つの方法として、やはり「アメリカン・ボードの教育事業」を足がかりとするのが賢明ではないかと考える。戦時下日本における、あるいは日本以外の伝道地におけるアメリカン・ボード宣教師文書の系統的収集は、これまでにCSが蓄えたノウハウを援用すれば不可能ではなく、その地道な解読から出発してはどうだろうか。

カンファレンスを通じ、比重はCかSかという発想ではなく、その不可分な構造的関係を示し、近代史においてC×Sがどれほど重要な領域であるかをあらためて伝えたつもりである。スピーカーに招いたのは、ほぼ初顔合わせの国内外研究者であり、普段のCSメンバーとは全く異なる顔ぶれを揃えた。語弊はあろうが、

いわば現状のCSを超え、広く関連学界に通用し、新たな提起を行いうる学際研究を志向した。今こそ、あの「両親」から独り立ちすべき／しうるときなのである。創設メンバーをはじめとする今は亡き諸先達は、このカンファレンスをどう受け止められるか、かなうことならお聞きしてみたかった。

転出以降も学部所属の教員としてCSに関わる吉田氏は、社内諸部局にメンバーが遍在したCSの初心に立ち返れば、本来の、そして今後もっとも出現が望まれる会員の姿だともいえる。社内の力の充実こそが社外の力を引き寄せる。今日、研究組織は多様化し、大学の教員や院生は様々な学内外の所属団体にアイデンティティを有し、目先の文脈に忙殺される。CSへの愛着・参加の無理強いはすべきことではなく、そうしたところかなうことでもない。とはいえ、このような時代にあって、業界の論理やしがらみとは無縁な研究の場がありうるとすれば、それは何より尊い。

「共同研究」はなかなか困難な事業である。当時においてすら、録音に耳を澄ませば、参加者間の微妙なきしみを感じないわけではない。だが、純粋に学問上のメリットに気付けた文字通り「有志」の徒が、たとえ数は少なくともうまく共同歩調を取れたとき、CSは活性化するだろう。CSの伝統とする資料収集・解読は、方法や視角の点において立場を異にする研究者がつながり合える回路として、いよいよ生命線となるだろう。

これほどにまで将来性のある研究対象が眼前に広がり、研究を進めるに十分な環境がある。関係者には、一朝一夕に成らざる歴史と可能性をもつCS研究会をどうか大切にしてほしい。その一点を願って筆を擱きたい。